

【第七八回研究例会】

中近東・韓国・日本における子どもに手渡す物語

日本における子どもに手渡す物語

大島 廣志

一、はじめに

私は都内の短期大学で二十年間、将来保育士になる学生に「民話」の講義をしてきた。それは、学生に日本の昔話絵本を読ませ、私が解説をするという内容であった。そこで、一つの昔話に十数種の絵本があることに気がつき、学生には「保育現場に出たら同じタイトルの昔話絵本を五つ読みくらべて、自分が一番納得できる昔話絵本を子どもたちに読んでください」ということをしてきた。優れた内容の昔話絵本もあれば、つじつまの合わない内容の昔話絵本もあり、玉石混淆であったからである。

私に与えられたテーマは「日本における子どもに手渡す物語」なので、たくさんの方が発行されているという基準で、数種の『笠地蔵』『桃太郎』、珍しい昔話の『山おとこのてぶくろ』を、口承文芸資料との関わりという点から考えてみたいと思う。

二、「笠地蔵」

だれでもが知っている「笠地蔵」は、瀬田貞二・再話 赤羽末吉・画『かさじぞう』（福音館書店 一九六一）『子どものとも』五八号。《子どものとも》傑作集は一九六六）と、岩崎京子・ぶん 新井五郎・え『かさじぞう』（ポプラ社 一九六七）の二書が有名である。岩崎の『かさじぞう』は教科書に掲載されたので、子どもたちの間では特に親しまれている。

瀬田は、柳田國男『日本の昔話』（一九三〇、一九四一、一九六〇年版）がある。一九三〇年版の書名は『日本昔話集（上）』。手に入りやすいのは角川文庫の一九六〇年版）所収の「笠地蔵」を原話にして再話している。それはストーリーの展開及び、「六台の地蔵さ、笠取ってかぶせた、爺あ家はどこだ、婆あ家はどこだ」のそりを曳くかけ声の同一性からも窺える。さらに佐々木喜善『江刺郡昔話』（郷土研究社 一九二二）に出てくる「上町・下町」他も瀬田再話には使われている。「よういさあ」のかけ声は、佐々木の『紫波郡昔話』（郷土研究社 一九二六）から、「あみがさをかぶったひとたち」という地蔵の擬人化は小笠原謙吉『紫波郡昔話集』（三省堂 一九四二）によっていると考えられる。つまり、瀬田は三冊以上の昔話集の「笠地蔵」を合わせて、昔話絵本『かさじぞう』を再話したといえる。

その文章の特色は、「むかし、あるところに、びんぼうなじいさんと、ばあさんと、あったと」に始まり、「どつとはらい」（岩

手の語り納め)で終わるまで、爺と婆の行動を中心に再話している点にある。よって瀬田の『かさじぞう』は昔話的といえる。だから他の昔話絵本と違って「瀬田貞二・再話」と記したのであろう。

優れた昔話絵本として評価の高い岩崎京子の『かさじぞう』は、鈴木棠三編『川越地方昔話集』(民間伝承の会 一九三七)の「笠地蔵」が基本になっている。爺婆が空白を搦くという岩崎独特の場面はこの資料によっていると推測できる。さらに、平野直『すねこ・たんばこ(第一集)』(未來社 一九五八)の「六地藏さまの話」から「じよいやさ」のそのの曳く音を用い、「六にんのじぞうさ、かさこ」とつて、かぶせた、じさまのうちは、どこだ、ばさまのうちはどこだ」の唄は、柳田の前出『日本の昔話』によっている。『日本の昔話』では「六台地蔵」になつてゐるのを、瀬田は意味を解しかね「六だいじぞう」とし、岩崎は「六にんのじぞう」としている。本来は「六体地蔵」であつたらう。

こうしてみると、岩崎もまたいくつもの資料を重ね合わせて『かさじぞう』を書いたことがわかる。その文章の特色は、じさまとばさまの心情をていねいに描写している点と、じぞうに對するじさまの愛情の深さを表現している点にある。

瀬田と岩崎の文章を比較すると両者の昔話観の違いが明確になる。瀬田は行動中心の再話であり、岩崎は人物の心情を中心にしてゐる。換言すれば、瀬田は昔話的であり、岩崎は文学的

であるということになる。どちらを好むかは読者によつて異なるであらうが、二書ともに「笠地蔵」の昔話絵本として読みつがれていくであらう。

西本鶏介・文 黒崎義介・絵の『かさじぞうさま』(フレール館 一九七五)は、町へたきぎを売りに行つたじいさまがたきぎが売れないので笠と交換し、その笠を地蔵にかぶせる話である。内容から判断すると前出『すねこ・たんばこ(第一集)』を原話にしてゐる。西本は家のおもてに「こめだのさかなだの、どつさり、はいったたわらがおいてありました」と書いてゐるが、中味を見ていないのになぜ中味が分かるのかという疑問が残る。これは岩崎にもいえる。瀬田は「たわらをみれば」ときちんと表現してゐる。さらに西本絵本ではたわらを見たときんじいさまは「おじぞうさまありがとうございませう」と礼をいつてゐる。まるでおじぞうさまがたわらを持つてくることを予期していたようである。

須知徳平・文 石倉欣二・絵『かさじぞう』(コーキ出版 一九八〇)も『すねこ・たんばこ(第一集)』を原話にしてゐる。この絵本の問題点は、大年の日の出来事であることを明確に示していないことである。「笠地蔵」は元來、地藏信仰と正月神信仰が合わさつてゐる話なのだから、大年の日であることはとても大切な設定であるのに、それが欠除してゐる。地藏はおじいさんの家にくるときも帰るときも「じよいやさ、じよいやさ」とかけ声をかけてそりを曳いてゐる。帰りは軽いからかけ声は

必要ないのだ。同じタイトルの昔話絵本でも、薦めたい絵本もあるし薦めたくない絵本もあるとはこういうことである。

### 三、「桃太郎」

「桃太郎」の昔話絵本には、「鬼退治型」「鬼退治結婚型」「猿蟹結合型」などがある。ここで取り上げるのは「鬼退治結婚型」で、桃太郎が鬼退治の後、鬼に捕えられていた姫を助け出し、その姫と結婚するという結末となる。松居直・文 赤羽末吉・画による『ももたろう』（福音館 一九六五）は「鬼退治結婚型」で、日本図書館協会・全国学校図書館協議会選定図書になっていることもあり、どこの図書館にも置かれている。

松居が原話にしたのは、佐々木喜善の『紫波郡昔話』（郷土研究社 一九二六）に収められている藤田留蔵という小学生の書いた「桃の子太郎」である。なぜ松居が小学生の作文を原話にしたかというのは、柳田國男の『桃太郎の誕生』（三省堂 一九三三。定本や角川文庫にも収録されている）の影響と考えられる。柳田は小さ子譚は結婚して一生を終えるのが原型であるとし、岩手県紫波郡の例を挙げている。松居はこの柳田説に共鳴し『ももたろう』を書いたのであろう。からすが桃太郎の家へやってきて鬼ヶ島の鬼の悪事を伝える場面や、桃太郎が鬼ヶ島から助け出した姫と結婚するところから原話を『紫波郡昔話』と特定できるのである。

そもそも柳田の「妻もとめ」の根拠になった紫波郡の昔話を

検討する必要があるのではないか。これは小学生の作文を小笠原謙吉が佐々木喜善に送り、佐々木がそれを『紫波郡昔話』に収録したという経緯がある。小学生藤田留蔵がだれに聞いたかは不明。紫波で語られていた話なら、結婚モチーフが岩手県内で見つかったもよいのだが、それはない。現在遠野市の語り手は姫救出の「桃太郎」を語っているが、これは紫波の話を基に語っている（石井正己「昔話と観光」三弥井書店 二〇一三）。こうしてみると、松居が原話にした話は、本当に語られていた昔話なのかという疑問がわいてくるのである。

### 四、『山おとこのてぶくろ』

〈松谷みよ子の絵本〉

『山おとこのてぶくろ』の昔話絵本は、他にもあるかもしれないが現在のところ、松谷みよ子・文 田島征三・え（ほるぷ出版 一九八四）しか見たことはない。松谷は絵本の最後に参考資料として、『陸奥二戸の昔話』丸山久子・佐藤良裕編（三弥井書店 一九七三）、『みちのくの海山の昔』佐々木徳夫（講談社 一九七五）の二書を挙げている。松谷絵本のあらすじを述べよう。

あるところにとうさんとかあさんと、お月お星お花の三人の娘がいた。とうさんが山で「あーあ」とあくびをすると、山男が現われ「娘をひとりもらう」といって、お月を連れていく。

山男はお月に「留守番をしている。その間に手ぶくろを飲んでおけ。二つの部屋はのぞくな」といつて出ていく。お月は手ぶくろを飲まずに床下に投げる。一つ目の部屋を開けると、金銀玉がある。二つ目の部屋には人の骨。山男は帰ってきて、「部屋をのぞいたな。手ぶくろは飲んだか」と聞く。お月は「飲んだ」という。嘘ついたことがバレてお月は鍋で煮られる。

とうさんとかあさんは山で「あーあ」とあくびをする。山男が出てきて「あくびをしたから、娘をもらう」といつてお星を連れていく。同じことがおこり、お星は手ぶくろを屋根に放り投げ、同じように嘘をついて殺される。

とうさんとかあさんは家で「あーあ」とあくびをする。山男が出てきて「あくびをしたから、末の娘をもらう」といつてお花を連れていく。山男は「手ぶくろを飲んでおけ。部屋をのぞくな」といつて出ていく。お花が部屋をのぞくと宝物。次の部屋をのぞくと、若者が山刀を刺されて倒れていた。お花は若者の手当てをして、手ぶくろの飲み方を聞く。若者は「きざんで粉にして飲め」という。お花は手ぶくろをきざんで粉にして飲んだ。山男が帰ってきて手ぶくろを呼び出すと、「腹の中に出て出らんね」という。「部屋は開けたか」といつと「開けた」とお花がいう。山男は「うそをつかない嫁がほしかった」といつと、若者が出てきて山男を殺した。お花と若者は夫婦になった。お花はときどき、「うそつかない嫁がほ

しかった」と泣いた山男のことを思い出す。

山男が娘たちに手袋を飲ますという奇抜な内容の資料は、岩手の『陸奥二戸の昔話』しかない。ちなみに一九七三年刊の『陸奥二戸の昔話』は、一九六三年刊の佐藤良裕編『福岡の昔話』（岩手県二戸郡福岡町教育委員会）の増補版で「山男の手袋」初出は『福岡の昔話』である。次に松谷絵本の原話である「山男の手袋」を『陸奥二戸の昔話』から引用する。

昔々、あつたず。

ある所ね、父様ど母様ど娘あ三人あつたず。ある時、父様ど母様山さ行って働でらけやこわぐなつた（疲れた）へで「あーあ」て、あぐびして休んでらけや、山男あ来て、

「今あくびしたのあだれでえ」  
たへで、

「おらだ」  
たけや、

「娘ああつたら、もらねばなねえ」

たへで、大き娘呉でやつたず。山男あ、娘をほら穴さ入でらず。その穴の右の穴さば、宝物入でれ、左の穴さば、骨から入でらたず。ある時、山男あ山さ行く時、娘さ「どの部屋もあげであなねえや。おれあ戻つて来るうちね、この手袋飲んでろ。飲んでながつたら殺すえまだ」て、出はて行つたず。

娘あその手袋飲んだふりあして、床下の下さ入でらず。えと  
さま（暫く）経ったけや山男あ来て、

「さきだの手袋飲んだが」

たへで、

「飲んだ」

たけや、

「手袋あ、手袋あ、出はて来」

て、手こ打だけや、

「はーえ」

て、出はて来たへで、

「うそつだな」

て、娘を煮で食たず。父様ど母様、まだ山さ行つてかへでら  
けや、こわぐなつたへで「あーあ」て、あぐびしながら「娘あ  
山男ね連でがれで、どやてるだがな」てらけや、まだ山男あ  
来て、

「今あぐびしたのあだれでえ」

たへで、

「おらだ」

たけや、

「娘ああつたら、もらねばなねえ」

たへで、二番目の娘呉でやつたず。山男あ、娘をほら穴さ入  
でれ「どの部屋もあげであなねえや。おれあ戻つて来るうち  
ね、この手袋飲んでろ。飲んでながつたら殺すえまだ」て、

出はて行つたず。娘あその手袋飲んだふりあして、屋根さ上  
げでらず。えとこま経ったけや山男あ来て、

「さきだの手袋飲んだが」

たへで、

「飲んだ」

たけや、

「手袋あ、手袋あ、出はて来」

て、手こ打だけや、

「はーえ」

て出はて来たへで、

「うそつだな」

て、娘を煮で食たず。父様ど母様、まだ山さ行つてかへでら  
けや、こわぐなつたへで「あーあ」て、あぐびしながら「娘  
二人も山男ね連でがれで、どやてるだがな」てらけやまだ山  
男あ来て、

「今あぐびしたのあだれでえ」

たへで、

「おらだ」

たけや、

「娘ああつたら、もらねばなねえ」

たへで、三番目の娘呉でやつたず。山男あ、娘をほら穴さ入  
でれ「どの部屋もあげであなねえや。おれあ戻つて来るうち  
ね、この手袋飲んでろ。飲んでながつたら殺すえまだ」て、

出はて行つたず。「部屋あげるな」て、言たへで、何あ入つて  
るがどもて見たたくてあげだけや、右の方さは宝物あ入つてら  
たずし、左の方さは骨からだ、のどさ刀刺されだ侍あ入つて  
らたへで、刀抜えて呉で、

「この手袋どやて飲んだらえがべ」

て、聞だけや、

「粉ねして飲めばえだ」たへで、石で打で粉ねして飲んでし  
まつたず。暫く経つたけや山男あ来て、

「さきだの手袋飲んだが」

たへで、

「飲んだ」

たけや、

「手袋あ、手袋あ、出はて来」

で、手こ打だけや、腹の中で、

「はーえ」

て、返事したず。その中ね、侍あ刀で山男殺して、二人して  
宝物えつべえ（沢山）持つて来たず。

これ聞でどつとばれえ。

この岩手の話を基にして松谷絵本『山おとこのてぶくろ』が  
成立した。しかし、松谷の『山おとこのてぶくろ』は絵本が初  
出ではなかった。民話の研究会編『山と川のようなかい』（ポプラ  
社 一九七九）に「山男の手ぶくろ」としてすでに収められて

いた。こちらは、「むかしこあ、あつたずな」で始まり、「どつ  
とはれえ」で納める昔話の形式を踏襲している。娘三人も「上  
のむすめ・二番目のむすめ・三番目のすえむすめ」となつてい  
る。絵本は、「むかしこひとつ語りましょ」で始まり、「お月・  
お星・お花」と継子話の娘の名が与えられ、お花が山男のこと  
を思い出すところで終わっている。つまり、一九七九年版は昔  
話の再話であり、一九八四年版の絵本は昔話離れをした文学的  
再話といえる。

#### 〈巖谷小波の『魔王ア、』〉

山男が娘にてぶくろを飲ますという試練はいつたい何に起因  
しているのか、ずっと疑問に思っていた。それを解決してくれ  
たのが、李ジョンヒンである。李は日本昔話学会二〇一一年度  
大会において「日本の昔話『山男の手袋』をめぐる」の研究  
発表をしている。論文として公にはなっていないのだが、  
二〇二〇年にその発表レジュメを入手できた。李は、「山男の手  
袋」は巖谷小波の『魔王ア、』（一九〇七）の昔話化したもので、  
さらに『魔王ア、』はイタリヤのシチリア島の「アアの話」  
（二八七〇）を翻訳したものであると言及している。小波の『魔  
王ア、』のあらすじを記す。

ある山に年とつた貧乏なキコリと三人の孫娘がいる。キコ  
リが山で「ア、」とため息をつくとき、「何だ」と男が現れる。

ア、は魔王の名前。キコリは金がないというので、ア、は金をやるから娘を用人にするという。キコリは魔王とともに家に帰り、姉娘に訳をいう。魔王は姉娘を山の御殿へ連れて行く。

魔王は「三日留守にするから人間の脛を食っておけ」といつて出ていく。姉娘は脛を縁の下に捨てる。魔王が帰ってきて、脛を呼ぶと「ハイ」と返事が返る。姉娘は嘘をついた罰で脛から食われる。キコリは山へ行き「ア、」と魔王を呼び出し、金が欲しいから二番目の娘を魔王に渡す。魔王は「留守にするから人間の足首を食っておけ」といつて出ていく。二番目の娘は足首を屋根裏に隠す。魔王が帰ってきて、足首を呼ぶと「ハイ」と天井から下りてくる。二番目の娘は頭から食われる。

キコリは金が欲しいため、末娘のマルザを連れて山へ行き、「ア、」と魔王を呼び出す。魔王はマルザを連れ帰り、今度は死人の腕を与えて出て行く。マルザが考えていると空の方から声がする。「焼いて、粉にして、灰にして腹にまけ」と教えてくれた。その通りにすると魔王が帰り、腕を呼び出す。腕は「マルザのお腹にいる」という。魔王はマルザを正直者だといつて可愛がる。マルザは死者を生き返らせる薬と蔵の鍵を預かる。魔王の留守に蔵を開けると若い大将が死んでいた。薬で生き返らせると「私は王子、魔王を退治する方法を探ってくれ。それまで私は死んだ真似をしている」という。

魔王が帰ってくると、マルザは魔王を守るために弱点を知つ

ておきたいという。魔王は「若い柳の枝を耳の穴に差し込まれると死ぬ」と教えてくれる。マルザは若い柳の枝を切ってきて、魔王の耳の穴に差し、魔王が死ぬと王子を生き返らせ、二人で城へ帰る。マルザは王妃となる。

風が枝を吹き落とし、魔王復活。城へ行き、魔薬を使つて皆を眠らせる。マルザは眠っていなかったので魔王に驚く。魔王がマルザを釜茹でにしようとしたとき、マルザが暴れたので魔薬の瓶が割れ、皆が復活。魔王は捕まり釜茹でにされる。王子とマルザは一生涯安楽に暮らす。めでたし、めでたし。

李はこの発表で、岩手・宮城の昔話に加えて、山形県酒田市の例を挙げている。佐藤真理子編「山形県酒田地方の昔話」(『昔話—研究と資料—』四号 三弥井書店 一九七五)の中の「孝行むすめ」である。李以後、筆者の調査により岩手県胆沢町(現奥州市)にもう一話存在していることが判明した。「樵と三人の娘」(胆沢町公民館編『いさわの民話と伝説』胆沢町教育委員会 一九七〇)で小波の『魔王ア、』の影響下にある話は合計四話となった。

この四話に共通しているのは、小波の『魔王ア、』に存在した魔王復活がないことである。四話ともに末娘が山の魔物を退治して終わっている。これは何を意味するかというと、東北の四話は小波の話が直接に伝わったのではないということである。山の魔物を退治した後に、魔物が復活するのは日本の昔話にな

じまないと考えた人が小波の話から魔物復活を除き、東北の地に広めたのではないか。山形の例は、語り手が小学校四年のときに担任の先生から聞いたと述べている。教科書に載っていたわけではないから、一つの仮説として、珍しい話を語っていた口演童話家によってもたらされたとも考えられる。

《山おとこのてぶくろ》に至るまで

さて、魔王・山男は、娘に何を飲ませたかということになる。小波は「すね・足首・死人の腕」、岩手胆沢は「腕・姉の腕・腕」、山形は「腕・人間の腕」（二人娘）、宮城は「腕・もも・すね」となっている。ただ岩手二戸のみ「手袋」なのである。

二戸の語り手中村イソは一九〇九（明治四二）年に生まれ、三歳のときにはしかにかかって盲目となった。盲目のため学校へも行かず、近所の子どもと遊ぶこともなく、郵便配達夫の祖父から昔話を聞いて育った（『陸奥二戸の昔話』解説より）。イソの語る四一話の中には「ヘンゼルとグレーテル」「死神の話」「プレーメンの音楽隊」の翻案もある。イソの管理する話は土地に伝わる昔話だけではなかったのであり、それらは祖父から聞いた話であった。祖父は盲目の孫に山男と三人の娘の話を聞かせるとき、娘たちに「腕・もも」を飲ませるのではなく、「手袋」に変えたのではないかと想像する。

これまで、松谷絵本『山おとこのてぶくろ』の成立に至るまでを辿ってきた。シチリアの昔話「アアのお話」↓小波『魔王

ア、』↓東北の口演童話（？）↓岩手二戸の郵便配達夫↓孫の中村イソ↓佐藤良裕編『福岡の昔話』↓丸山久子・佐藤良裕編『陸奥二戸の昔話』↓松谷みよ子一九七九年版『山男の手ぶくろ』↓松谷みよ子一九八四年版絵本『山おとこのてぶくろ』という経路である。「日本みんわ絵本」のシリーズで昔話の絵本なら、一九七九年版も捨て難いと思われる。しかし、松谷は一九七九年版を文学的に書き換えて絵本『山おとこのてぶくろ』を完成した。

## 五、おわりに

昔話絵本『笠地蔵』『桃太郎』『山おとこのてぶくろ』と昔話資料との関係を追って、いくつかの問題点を指摘した。それらの昔話絵本を多様性のもとにすべて受け入れてよいのであろうか。「日本における子どもに手渡す物語」を考えるとき、どうしたら日本の昔話をよりよく反映した昔話絵本ができるのかということを、児童文学者や出版社とともに口承文芸研究者も関わる必要があるのではないかと思う。

※第七八回研究会時の発表にかなり手を加えてまとめたことを付記する。

※二〇二二年二月発行の『全日本語リネットワークニュース』第八三号に、「巖谷小波と日本の昔話―『山男の手袋』をめぐって―」を執筆しているが、本文と一部内容が重複している。

（おおしま・ひろし）